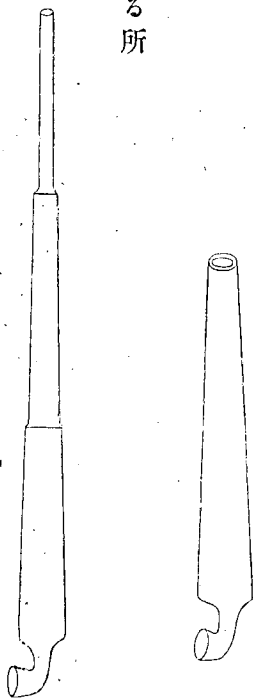


に三四人も有たり、又女は繼らうとて、長きらうを二ツに切て、夫を相口をこしらへ、繼て長ききせるにして吞たり、仕舞時は二つにして、懐中するなり、其繼目の相口を角にてするもあり、銀にり、又懐中きせるとて、打のべのきせるを三繼にて、入子にしてふり出せば、能かげんの長ききせるになる様にして、納る時は吸口より入子にして仕舞やうにして、みじかくなるなり、一旦はやりて、殿中御役人など専ら用ひたり、畢竟懐中の爲なり、又瀬戸物きせるもありけり、雁首吸口をきれいに焼物にしても、やうなども焼付たり、是は婦人子供の化粧きせるなり、ともにすたりて、今は餘りしる人もまれなり、

懐中きせるたゝみたる所

懐中きせるふり出したる所



〔雅筵醉狂集〕螢

飛ほたるたばこの火をやつぎ煙筒。

〔好色一代女〕五濡間屋硯

繼煙管を無理どりに、合羽の切のたばこ入をしてやり、

〔煙草記〕長歌

たばことは、まなにはなにと、かくやらん、略○中 客あれば、お茶より先に、たばこぼん、愛敬草に、さし
いだす、はなしのたへま、つぎぎせる、口上ひねり、ふくけふり、略○下